道米子伯太線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島根県安来市所在

石田遺跡

1994年3月

島根県教育委員会

序

この報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託をうけて、平成４・５年度に実施した一般県道米子伯太線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査の結果をまとめたものです。

調査地は県内でも古代遺跡など豊富な文化財が今に残る安来の地の中でも、鳥取県と島根県の県境に位置し、国道９号線・ＪＲ山陰本線が近隣を通過するなど交通の一大要衝として、古代から繁栄したことが伺えます。

調査は安来市吉佐町石田に所在する石田遺跡について実施し、狭い範囲ながら古墳時代初頭の溝１条を検出しました。

わずかではありますが、伯耆との国境に近い吉佐の歴史を探る上で、貴重な資料を提出するもので、地域の歴史や文化財に対する理解の手掛りとして、広く一般の方々のお役立てば幸いと思います。

なお、発掘調査および本書の刊行にあたって多くのご協力を頂いた、島根県土木部ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

島根県教育委員会

教育長　今　岡　義　治

例　　言

1・本書は島根県土木部道路課の委託を受けて、島根県教育委員会が1992・1993（平成4・5）年度に実施した、一般県道米子伯太線緊急地方道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2・調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

平成4（1992）年度

事務局　目次理雄（文化課長）、山根成二（同課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課主幹〈埋蔵文化財調査センター調査第2係長〉）、丹羽野裕（同主事）、大庭俊次（同主事）、佐々木聡（同教諭兼主事）

平成5（1993）年度

事務局　広沢卓嗣（文化課長）、山根成二（同課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課主幹〈埋蔵文化財調査センター調査第2係長〉）、岩橋孝典（同主事）、花井浩（同講師兼主事）

3・遺物の整理・実測には岩橋・花井があたり、野中洋子・桑谷美代恵の協力を得た。

4・遺物写真の撮影は錦田剛志（同調査2係主事）・花井の協力を得て岩橋が行なった。

5・挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

6・本書の編集は、文化課職員の協力を得て岩橋が行ない、各文責は目次欄に記載した。

7・本遺跡出土遺物及び実測図・写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　　次

序

例　　言

第1章　調査の経緯 ……（卜部・大庭）……1

第2章　位置と環境 ……（花井）……1

第3章　調査の概要

第1節　遺　　構 ……（岩橋）……4

第2節　遺　　物 ……（岩橋）……4

第4章　まとめにかえて

第1節　石田遺跡の意義 ……（岩橋）……10

第2節　山陰地域内出土の外来系土器について ……（岩橋）……11

第１章　調査の経緯

平成４年度に島根県広瀬土木事務所から島根県教育委員会に対して一般県道米子－伯太線改良工事予定地内に遺跡がありそうなので発掘調査を実施してほしい旨の依頼があった。当該の場所は、安来市吉佐町地内にあり、ちょうど一般県道米子－伯太線改良工事予定地と国道９号線バイパス（安来道路）予定地とが交差する辺りであり、安来道路では平成５年度に石田遺跡として発掘調査を予定していたところの隣接地なので、発掘調査が必要と考えられた。島根県教育委員会では、年度の途中であり既に全ての調査員がそれぞれの現場に貼りついている状況であったが、一方では県道が安来道路の工事のアクセス道路としての性格を持っており工事が急がれることから対応に苦慮した。

島根県土木部道路課と教育委員会文化課で協議を重ねた結果、平成４年度はこの部分の石田遺跡の範囲確認調査を教育委員会文化課埋蔵文化財調査センターで実施することになった。これを受けて、平成４年９月10日付けで道路課から文化課に正式な調査依頼があり、同９月28日付けで島根県知事と島根県教育委員会教育長との間で調査の契約を取り交わした。

現地での調査は平成４年11月16日から11月26日まで行なった。まず、県道建設予定地内のうち1,400㎡の区域内に水田の区画に沿って大小12本のトレンチを設定し範囲確認調査を行なった。その結果南側の同遺跡内一般国道９号（安来道路）建設予定地に接する560㎡の区域において、水田耕作土35㎝前後と数ｍに及ぶ亜円礫層に挟まれたごく薄い遺物包含層（10～20㎝）を確認した。この層からは６世紀後半ごろと思われる須恵器蓋杯の蓋と土師器甕の小片、黒曜石の剥片などが出土した。このことにより、双方協議を行なって、平成５年度に本調査を実施することになった。本調査は平成５年６月10日付けで契約を行ない同10月25日から11月17日まで行なった。

第２章　位置と環境

石田遺跡は島根県安来市吉佐町字石田に所在する。安来市吉佐町は島根県の東端で鳥取県米子市に隣接しており、そのなかでもこの遺跡は同町内の東にあり、県境のごく近くに位置している。

本遺跡は、東に鳥取県との県境にあたる国吉山などの丘陵が南北に延び、西には平ラⅡ遺跡・吉佐山根１号墳[註1]・穴神横穴墓群が存在する丘陵に遮られた地形を呈し、両丘陵の谷間を縫って、

南から御茶屋川が吉佐の小平野に流れ出る標高約８ｍの低地に広がる水田・畑部分にあたる。現在遺跡から北の中海までは直線で700ｍの距離があるが、古代においてはさらに遺跡近くまで湾入していたものと考えられる。

周辺には数多くの遺跡が存在しているが、調査例は少なく、内容が知られているのは古墳が主であった。しかし、最近の調査で石田遺跡の東側に隣接しているカンボウ遺跡より弥生時代中期から後期にかけての遺物が検出されたことにより、石田遺跡周辺でもそのころから人々が定着していたことが伺える。

また、国吉山の北に延びる丘陵先端部にあった古墳時代前期の八幡山古墳や今年度調査を行なった吉佐山根１号墳は箱式石棺を主体部に持つもので西方の荒島古墳群などよりは前代の伝統をひきついでいるものである。

石田遺跡の東に隣接して丘陵の西端部にある神代塚古墳は、横穴式石室が露出しており、山陰須恵器編年Ⅲ期の須恵器が表採されているが、この古墳の年代を直接的に示す資料であるかは確証がない。石田遺跡の南東約200ｍには神宝古墳群があり、横穴式石室が露出している古墳もある。
一方西の丘陵には、家形石棺や隆縁石障内蔵の横穴もある穴神横穴墓群や平横穴群など横穴墓が多く知られている。また、カンボウ遺跡(註2)からは、円筒埴輪を持つ後期古墳が２基確認された。

なお、石田遺跡のなかでも安来道路建設予定地内にかかるところからは（平成４年度本調査）包含層中に少量ではあるが弥生時代後期の土器が出土している。また、建て替えの痕跡を持ち、作り付けの竈を備えた古墳時代後期の竪穴住居跡や柱穴群、溝状遺構、土坑、古墳時代後期に埋没した自然河道などを検出した。また、直接遺構にはともなわないものの、包含層中より鎌倉～江戸時代に至るまでの白磁・青磁・土師質土器・青花・伊万里・唐津・備前などの中近世土器や北宋銭、寛永通宝も出土したことにより周辺に中近世の集落域等が存在した可能性を考えることができる。

参考文献

１・錦田剛志「前期古墳の調査－安来市平ラⅡ遺跡　吉佐山根１号墳－」『島根県埋蔵文化財調査センターニュース』５号　1993

２・卜部吉博・丹羽野裕・深田浩・岩橋孝典　他「一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅶ－　石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡」　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1994

（建設省国土地理院発行の１：50,000の地形図・米子を使用）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	石田遺跡	16	島田黒谷Ⅱ遺跡	31	神宝古墳群	46	門生古窯跡群高畑地区
2	国吉遺跡	17	島田黒谷Ⅰ遺跡	32	油田・平古墳群	47	門生古窯跡群山根地区
3	カンボウ遺跡	18	譜請場遺跡	33	四方神古墳	48	明子谷遺跡
4	平ラⅡ遺跡	19	島田南遺跡	34	平横穴群	49	長曾遺跡
5	平ラⅠ遺跡	20	才ノ神遺跡	35	河原崎古墳群	50	大日さん古墳
6	山ノ神遺跡	21	越峠遺跡	36	八幡山遺跡	51	猫ノ谷遺跡
7	徳津見遺跡	22	岩屋口遺跡	37	茶屋畑廃寺	52	長曾土壙墓群
8	目廻遺跡	23	臼コクリ遺跡	38	八幡山古墳	53	高広遺跡
9	五反田遺跡	24	大原遺跡	39	嵩横穴	54	大神谷古墳群
10	陽徳遺跡	25	宮内遺跡	40	塚根山古墳群	55	寺谷遺跡
11	陽徳寺遺跡	26	国吉山古墳群	41	塚根山横穴群	56	叶谷遺跡
12	門生黒谷Ⅲ遺跡	27	吉佐古墳	42	子枝宅遺跡	57	毘女塚古墳
13	門生黒谷Ⅱ遺跡	28	六の坪遺跡	43	山ノ神古墳		
14	門生黒谷Ⅰ遺跡	29	神代塚古墳	44	松本古墳		
15	島田黒谷Ⅲ遺跡	30	吉佐貝姫塚	45	門生・山根遺跡		

第1図　周辺の遺跡位置図

第３章　調査の概要

第１節　遺　構

１　区

１区では全体的に表土層が薄く、部分的には黄褐色シルト層が表面に露出するなど遺構の削平が予想されたが、調査の結果遺構の下半部は残存していることが判明した。

ＳＤ０１（第３図）

１区の北半部をほぼ北流する溝であるが、溝の南側は黄褐色シルトを、溝の北側は調査区の西側にある御茶屋川の氾濫原にあたる堆積砂礫層をそれぞれ掘削して溝を作っている。幅75～90㎝・深さ15～30㎝をはかる。上層にあたる暗褐色礫混土層・黒褐色土からは古式土師器の壷・甕・鉢などが出土している。

ＳＢ０１（第３図）

３間（１間は2.1ｍ）分の柱穴を検出したのみで詳細は不明であるが、掘立柱建物に成り得るのなら調査区の西側にＰ－１～４に対応する柱穴が存在するものと思われる。

２　区

２区は遺構面の存在する黄褐色シルト層が南側１／３にしか存在せず、北側は御茶屋川の氾濫原と考えられる灰褐色砂礫層が厚く堆積しており、遺構はピット２個しか確認できなかった。

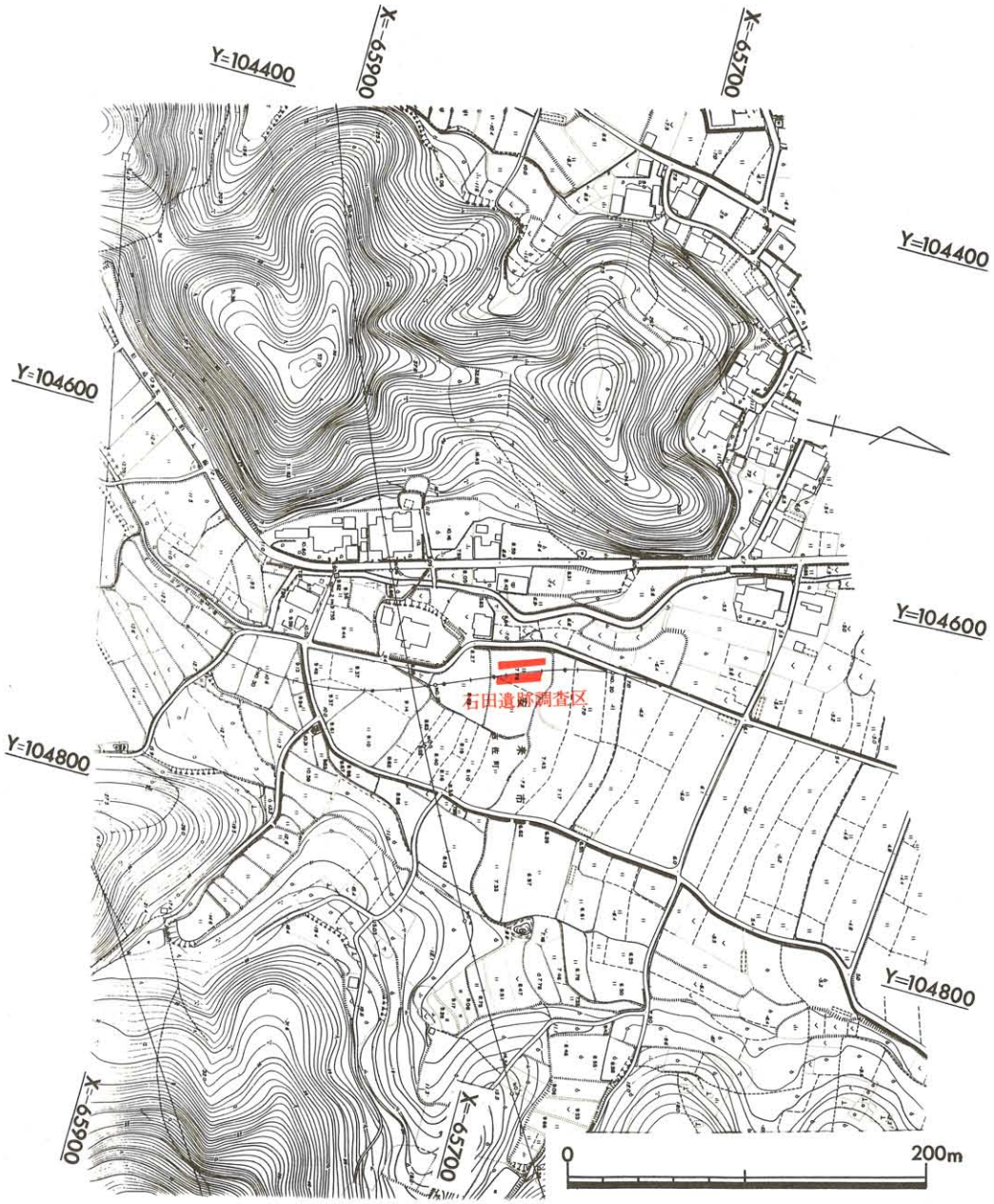
第２節　遺　物

１・２調査区出土遺物（第５図）

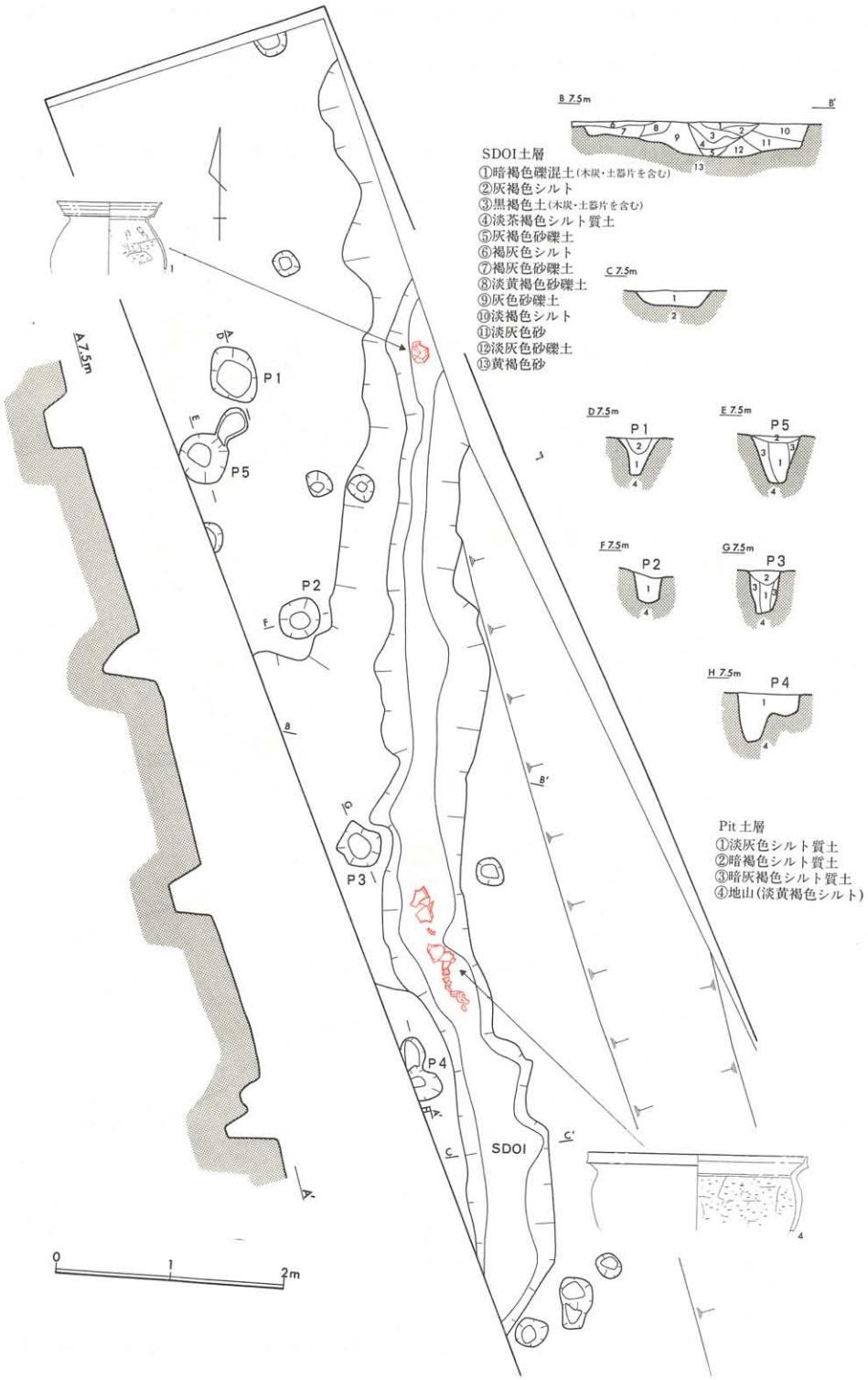
１はＳＤ０１（溝１）から出土した古式土師器の甕で、上半部の１／４程度が残存していた。復原口径18.9㎝・胴部最大幅26.0㎝をはかり、全体的に薄くシャープなつくりである。表面は風化しているが、口縁部内外面はヨコナデ調整で、複合口縁はわずかに外反しながら外傾し、先端は丸みを帯びながら細く終わる。胴部内面上半は丁寧なユビナデを施し、下半は横方向のヘラケズリを行

ない器壁の厚さを３～４㎜に整えている。胴部外面は磨滅が激しいが、わずかにハケメが確認でき、下半には煤が付着している。内面・断面は淡褐色で外面は暗橙褐色を呈している。

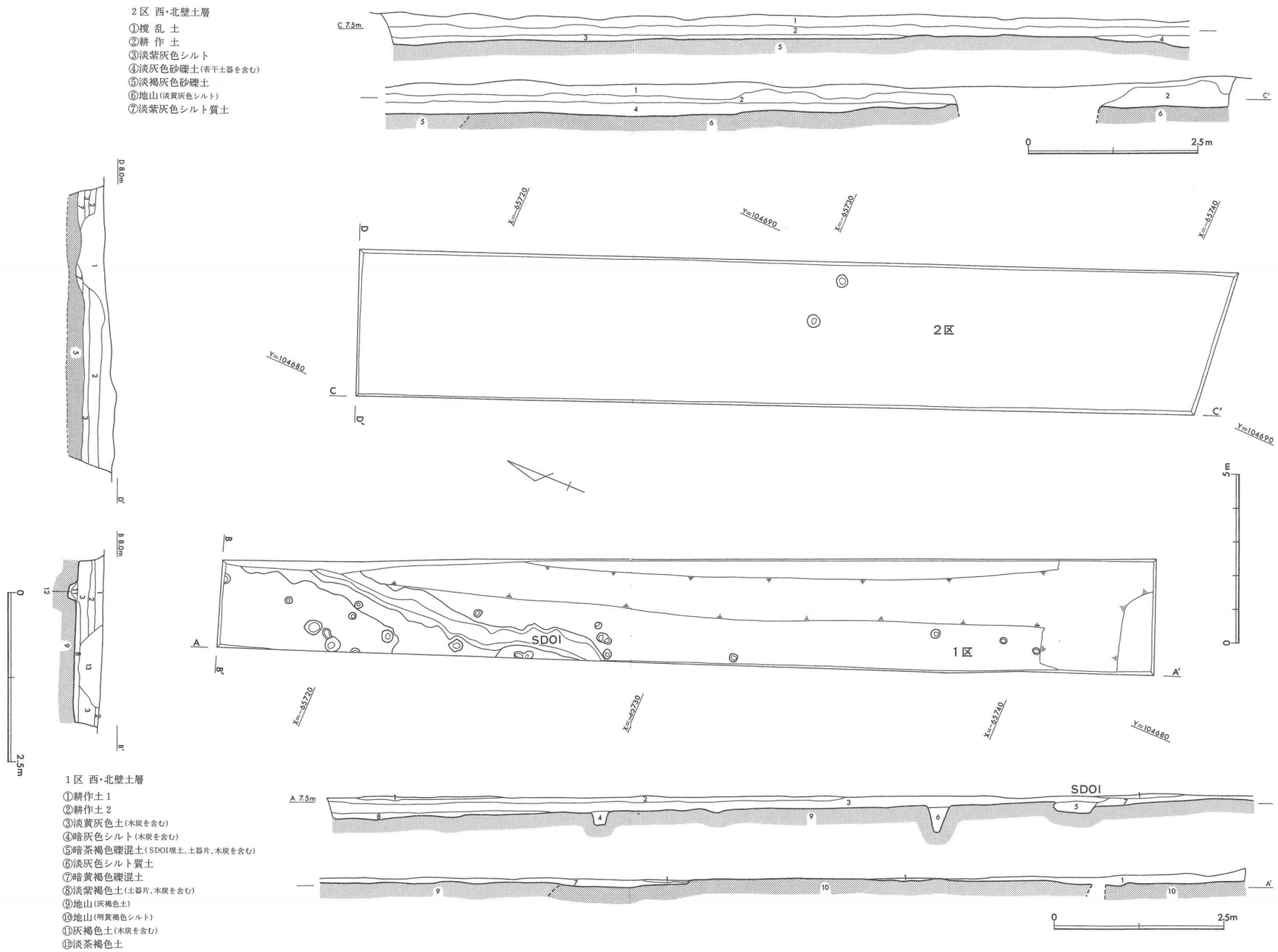
２は１と共に出土した古式土師器の壺であり、頸部の小片しか残存していないが、比較的薄くシャープなつくりである。口縁部は一旦外反した後、わずかに内傾し直線的に伸びるタイプになると考え



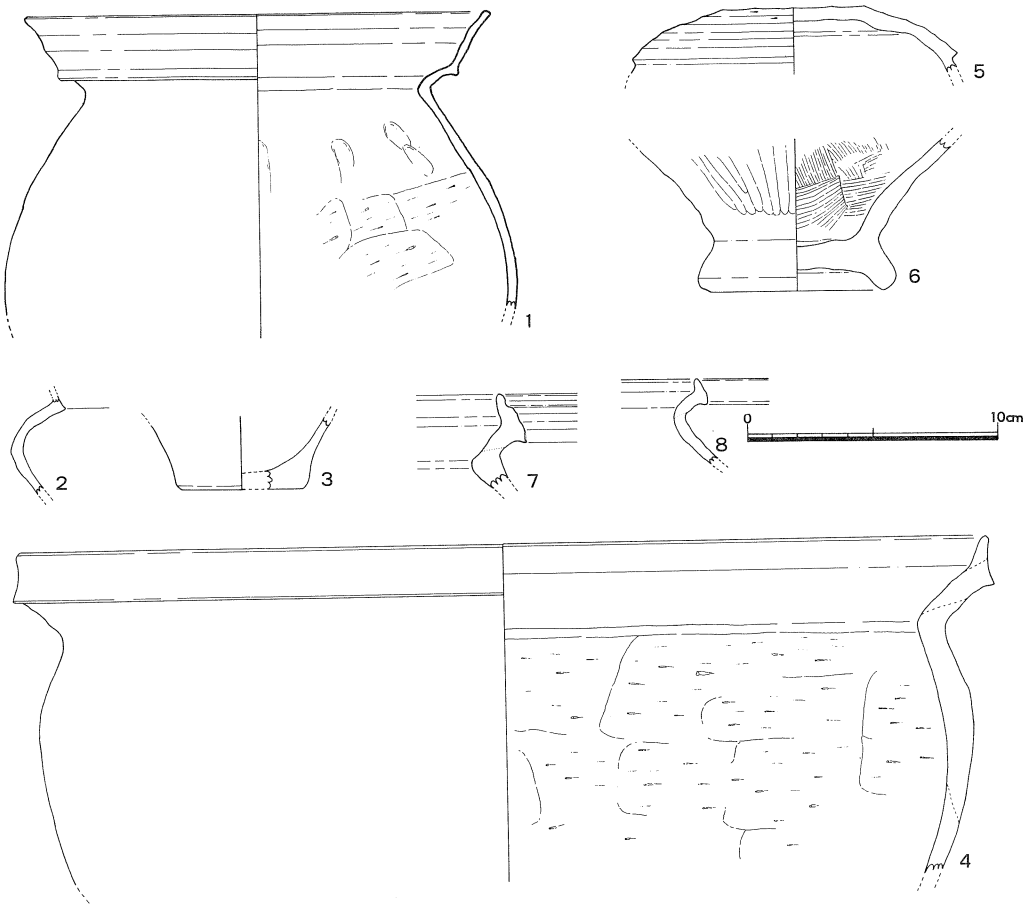
第２図　石田遺跡調査区位置図（Ｓ＝１／4000）



第3図　1区北半部遺構・遺物検出状況（S＝1／60）



第4図　調査区全体図（平面S＝1／150・断面S＝1／75）



第５図　Ⅰ区ＳＤ０１・Ⅱ区包含層出土土器（Ｓ＝１／３）

られる。内外面ともに淡褐色・断面は淡灰褐色を呈する。

３はＳＤ０１から出土した弥生土器の底部で、底径は4.9㎝をはかる。外面は淡褐色、内面は淡灰色、底部外面は黒褐色、断面は灰褐色を呈している。表面は磨滅しており調整は不明。

４はＳＤ０１より出土した鉢であり、口径38.9㎝・胴部最大径37.3㎝の大型品である。口縁部は一旦外反したあと、外反気味に短く立ち上がり口縁端部は丸くおわり、内外面ともヨコナデを施しているが特に外面には細かな条痕が残っている。胴部内面は頸部直下より横方向のヘラケズリを行ない、外面は磨滅のため調整不明である。外面は部分的に黒斑を持つがその外の内外面とも白橙褐色であり、断面は淡灰色を呈する。

５は２区暗褐色土中から出土した須恵器杯蓋である。口縁部は欠損し天井部しか残存していないが、稜は断面三角形の比較的シャープなつくりで、天井部外面の回転ヘラケズリはほぼ１／２の所まで達している。外面は暗灰色で、内・断面は白灰色を呈している。

６は２区淡灰色砂礫層から出土した弥生中期の短脚台付甕であり、胴部の大半は欠損している。

胴部外面は幅５㎜のヘラミガキが縦方向に丁寧に施され平滑に仕上がっている。底部内面には幅1.5㎝の原体によるハケメが横方向に連続的に施されておりクモの巣状の外観を呈している。脚台は短く外側に突出する。内面は黒褐色で外面は灰褐色であるが、底部は若干火に当たっているため淡赤褐色を呈し、胴部断面は黒褐色・脚部断面は淡灰褐色である。

７は２区暗褐色土中から出土した弥生後期初頭の甕である。小片でしかないが、口縁は一旦外反した後、内傾して短く立ち上がり、端部は丸く終わっている。口縁部外面は２条の退化した凹線（幅４㎜）を施している。内外面とも淡黄褐色で、断面は淡灰褐色を呈する。

８は２区暗褐色土中から出土した弥生中期の甕である。口縁部の一部しか残存していないが口縁部は外反した後内傾して短く立ち上がり、端部は丸く終わる。口縁部外面には列点文が施されているが風化のため判然としない。内外面は灰褐色で断面は暗褐色を呈する。

第４章　まとめにかえて

第１節　石田遺跡の意義

今回の調査で青木Ⅴ・Ⅵ式期（出雲では鍵尾２式・南講武草田５期）の溝が検出されたことにより、この御茶屋川下流域でも集落が展開していた可能性が示されたといえよう。出土した土器は僅かではあるが、４の鉢形土器は同時期の土器としては大型で口縁部の立ち上がりが短く、口縁部内側のテラス面が広い特徴を持つことなど出雲・伯耆の平野部では普遍的なものではなく、弥生時代後期から大型の鉢を製作する吉備南部に系譜を求めることのできる土器である。胎土は白橙褐色を呈するため、吉備産とは考え難く、吉備から人・製作に関する情報の移動があったと思われる。

因幡・伯耆・出雲など山陰地域では畿内庄内式新段階（纒向３式期）には外部への土器移動は極めて盛んに行われるが、逆に山陰の内部にもたらされる外来土器は多くはない。吉備南部系の土器も弥生時代後期の九重・的場式期には上東式の壺や特殊器台・特殊壺などがもたらされているが畿内庄内式に併行する青木Ⅳ～Ⅴ・Ⅵ期（草田４～６期）には吉備南部地域からの搬入土器もほとんど例を知らない。中国山地帯の土器も同様に山陰地域の平野部にはあまり移動してこないが、今回石田遺跡で吉備南部系の土器が出土し、また東隣のカンボウ遺跡から吉備系の上東式の壺や筑前福岡の下大隈式新段階の袋状口縁壺が検出されたことにより、当地域は少なからず外来要素を受け入れる地理的、社会的素地があったものと考えることもできよう。以下、出雲・隠岐・伯耆・因幡などの弥生時代後期から古墳時代前期における外来系土器を集成し、時期・地域・その内包する意義

について述べてみたい。なお、筆者が見落とした資料や誤認したものもあるかもしれないが、浅学な筆者の怠慢としてご寛容願いたい。

第2節　山陰地域内出土の外来系土器について

吉備系土器（第1表参照）

吉備系土器は山陰内では、比較的散見できる外来系土器である。特に安来・西伯地域を含めた日野川流域では、弥生時代中期末から吉備仁伍式と類似した壺類が散見され、従来上東式の壺や分銅型土製品の搬入から説かれていた高梁川～日野川ルートを通じた吉備との交流が想定[註①]される。また、千代川・天神川・斐伊川などの主要な平野を形成する大河川流域にもコンスタントに吉備系土器が出土するが量的には多いものではない。

吉備系土器の山陰への搬入・影響は弥生後期末の的場式（青木Ⅲ古段階）にピークを迎え、西谷3号墳などに代表されるように、特殊器台・特殊壺の搬入も見られるようになるが、それを境として、畿内庄内式に併行する青木Ⅳ～Ⅵ式期にはその数量が激減している。この青木Ⅲ古段階から青木Ⅳ式にかけての断絶は山陰内の四隅突出墓の小型化・土器製作技法の省時間化などにも反映されており、山陰内社会の変容・再編成などが起こった可能性が考えられる。

東海系土器（第2表参照）

東海系土器は関東・中部高地・北陸など東日本の広い範囲に多量にもたらされており[註②]、西日本では畿内を中心に多く確認され、一部は岡山・北部九州などにも達しているが、山陰では兵庫県豊岡市鎌田若宮3号墳出土のパレススタイル壺と鳥取市岩吉遺跡出土のS字甕のみである。

庄内～布留式期の汎日本的な土器移動を概観すると東日本では畿内と東海が主体となっているのに対し、西日本では畿内と山陰が主体となって各地に土器や製作技術・情報を搬入している。これは畿内政権の施策によって西日本では山陰と、東日本では東海地方と連帯して地方支配を進めたものと理解しており、山陰系土器が能登・近江・伊賀・紀伊を境にしてそれより東の地域では激減することと、東海系土器が畿内以西には数点しか達していないこと、畿内系土器が東西両日本に強い影響を与えることからも符合し、さらに山陰・東海両地方とも古墳時代中期まで在地的な土器形態が根強く残存すること、基本的に外来系土器を受け入れないなど共通点も多いことなどからも補強でき、汎日本的視野の中で山陰・東海地域の役割の一角として指摘できる。

上記のことからこの先、山陰地域では発掘が増加しても東海系土器が次々と発見される可能性は求心性の強い拠点集落を除いては余り無いであろう。この点から見ても岩吉遺跡は鳥取平野を代表

遺　跡　名	所　在　地	器　　種	出土遺構	時　　期	文献
因幡国府遺跡	鳥取県国府町	装飾壺	包　含　層	鬼川市Ⅲ	1
秋里遺跡	鳥取県鳥取市	甕	ＳＫ４１	亀川上層	2
岩吉遺跡	鳥取県鳥取市	甕	土坑ＳＫ５２	下田所	3
中河原古墳	鳥取県智頭町	甕	古墳封土中	才ノ町Ⅱ	4
後口谷１号墳丘墓	鳥取県倉吉市	上東式壺	墳丘頂部	鬼川市Ⅲ	5
大峰遺跡	鳥取県東伯町	装飾壺	第１トレンチ	鬼川市Ⅱ～Ⅲ	6
由良遺跡	鳥取県大栄町	装飾壺	Ｃ地区１トレンチ	鬼川市Ⅲ	7
東高江遺跡	鳥取県大栄町	甕	２号貯蔵穴	才ノ町Ⅱ	8
加茂遺跡	鳥取県名和町	上東式壺	不　明	鬼川市Ⅲ	9
岩屋ケ成遺跡	鳥取県江府町	上東式壺	包　含　層	鬼川市Ⅱ	10
長山馬籠遺跡	鳥取県溝口町	仁伍式・上東式壺	SI01・SK08等	仁伍・鬼川市Ⅰ	11
林ケ原遺跡	鳥取県岸本町	仁伍式壺	第９土坑	仁伍式	12
青木遺跡	鳥取県米子市	上東式壺	Ｂ地区竪穴住居07	鬼川市Ⅱ	13
御立山遺跡	鳥取県境港市	上東式壺	第３トレンチ	鬼川市Ⅲ？	14
長曾土壙墓群	島根県安来市	上東式壺	第24号土壙墓	鬼川市Ⅲ	15
臼コクリ遺跡	島根県安来市	特殊器台・特殊壺	地山直上	鬼川市Ⅲ	16
鍵尾遺跡	島根県安来市	上東式壺・特殊壺 小型特殊器台	土壙墓上面	鬼川市Ⅲ	17
石田遺跡	島根県安来市	鉢	ＳＤ０１	下田所	本報告
カウカツＥ－１号墓	島根県伯太町	小型特殊器台・特殊壺	墓壙上面	鬼川市Ⅲ	18
的場遺跡	島根県松江市	小型特殊器台・特殊壺	土壙墓上面	鬼川市Ⅲ	19
西川津遺跡	島根県松江市	高杯	包　含　層	鬼川市Ⅰ	20
タテチョウ遺跡	島根県松江市	甕	包　含　層	鬼川上層	21
南講武草田遺跡	島根県鹿島町	上東式壺	SD02・H-2・3 土器溜まり	鬼川市Ⅲ	22
竹田遺跡	島根県海士町	装飾壺	溝状遺構	鬼川市Ⅲ	23
西谷２号墳 西谷３号墳 西谷４号墳	島根県出雲市	特殊壺・特殊器台 特殊壺・特殊器台 特殊壺・特殊器台	表面採取 第１・４主体 表面採取	鬼川市Ⅲ 同 同	24 25
矢野遺跡	島根県出雲市	特殊器台・上東式壺	表面採取	鬼川市Ⅲ	26
庭反Ⅱ遺跡	島根県湖陵町	装飾壺	不　明	鬼川市Ⅲ	27

第１表　出雲・隠岐・伯耆・因幡出土の吉備系土器

する拠点集落である可能性が高い。

北部九州系土器（第３表参照）

常松幹雄氏による北部九州系土器の本州での確認例は４例とされていたが[註③]、近年の調査により

遺　跡　名	所　在　地	器　　種	出土遺構	時　期	文献
岩吉遺跡	鳥取県鳥取市	S字状口縁台付甕	SD－10	廻間2式	3
鎌田若宮3号墳	兵庫県豊岡市	パレススタイル壺	第1主体上面	廻間1式	28

第2表　出雲・伯耆・因幡出土の東海系土器

遺　跡　名	所　在　地	器　　種	出土遺構	時　期	文献
上福万遺跡	鳥取県米子市	壺	SI11	西新式古相	29
	島根県隠岐海中	壺	海中	下大隈式	30
カンボウ遺跡	島根県安来市	壺	Ⅱ区谷部埋土	下大隈式新相	31
平所遺跡	島根県松江市	直口壺	溝状遺構	下大隈式新相	32

第3表　出雲・隠岐・伯耆・因幡出土の北部九州系土器

遺　跡　名	所　在　地	器　　種	出土遺構	時　期	文献
岩吉遺跡	鳥取県鳥取市	伝統的V様式甕・庄内模倣甕	SD10	庄内式新段階	3
西大路土居遺跡	鳥取県鳥取市	第V様式甕・伝統的第V様式甕多数	SI-03・SI-04 SI-05・SI-14 SK-21	第V様式末～（纒向1式） 庄内式古段階	33
秋里遺跡	鳥取県鳥取市	河内型庄内式甕 伝統的第V様式甕 庄内式模倣甕	SK49 8層包含層 土坑SK54	布留式古段階 庄内式新段階 庄内式新段階	2 34 35
湖山第2遺跡	鳥取県鳥取市	伝統的第V様式甕	第2竪穴住居	布留式新段階	36
平ル林遺跡	鳥取県倉吉市	伝統的第V様式甕	C地区土抗C	布留式新段階	37
		伝統的第V様式甕	C10号住居東土抗	布留式新段階	
長瀬高浜遺跡	鳥取県羽合町	伝統的第V様式甕 河内型庄内式甕 河内型？庄内式甕	竪穴住居69 竪穴住居138	布留式古段階 庄内式新段階	38 39
尾高城址	鳥取県米子市	河内型庄内式甕	SD02	庄内式新段階	40
米子城址	鳥取県米子市	伝統的第V様式甕	包含層・土抗	庄内式新段階	41
夫敷遺跡	島根県東出雲町	伝統的第V様式甕・小型器台・小型丸底壺・有段	旧河道下層	布留式新段階	42
タテチョウ遺跡	島根県松江市	直口壺・伝統的第V様式甕 布留式傾向甕・大和型庄内式甕	包含層	庄内式新段階	20
		庄内式模倣甕	包含層	庄内式新段階	21
稲寄遺跡	島根県松江市	加飾二重口縁壺	不　明	庄内式新段階	43
中竹矢遺跡	島根県松江市	伝統的第V様式甕	SK181	庄内式？	44
南講武草田遺跡	島根県鹿島町	伝統的第V様式甕・小型器台 加飾二重口縁壺 小型高杯 伝統的第V様式甕・庄内式模倣甕 河内型庄内式甕 小型器台 鉢・小型粗製器台・直口壺 伝統的第V様式甕・庄内式模倣甕	SD02 SD03 SX06 CD－4区 DE－3区 EF－4区 H－5区	庄内式新段階 庄内式新段階 布留式古段階 庄内式新段階 庄内式新段階 庄内式新段階 庄内式新段階	22

第4表　出雲・伯耆・因幡出土の畿内系土器（播磨・丹波など周辺地も含む）
※タタキ甕とそれに共伴する土器のみ集成し、布留式土器は割愛した

遺　跡　名	所　在　地	器　種	出土遺構	時　期	文献
打塚遺跡	鳥取県倉吉市	壺	包含層	布留式古段階	45
井出挾遺跡	鳥取県淀江町	甕	3～5号住居跡	布留式古段階	46
東高江遺跡	鳥取県大栄町	壺	2号貯蔵穴	庄内式新段階	8

第5表　出雲・伯耆・因幡出土の東部瀬戸内系土器（東四国・播磨・吉備の一部）

遺　跡　名	所　在　地	器　種	出土遺構	時　期	文献
西谷3号墳	島根県出雲市	器台・把手付短頸壺 装飾壺・高杯	第1主体上面	的場式	25
西大路土居遺跡	鳥取県鳥取市	器台	ＳＩ－０４	的場式	33
奈免羅・西の前遺跡	鳥取県船岡町	器台	第4号溝	的場式	47

第6表　出雲・伯耆・因幡出土の東山陰・北陸系土器（但馬以東）

増加の兆しが見え、石田遺跡に近接するカンボウ遺跡から下大隈式の壺が新たに確認されている。北部九州系かどうか疑問がのこる上福万遺跡例を含めて6例が日本海側より出土しており、僅かではあるが、弥生後期には日本海を通じて九州からの情報・文物がもたらされたのであろう。しかし、庄内～布留式併行期になると山陰から北部九州に向けての一方的な土器移動に終始し、九州からの土器をはじめとした情報の流入は確認できない。

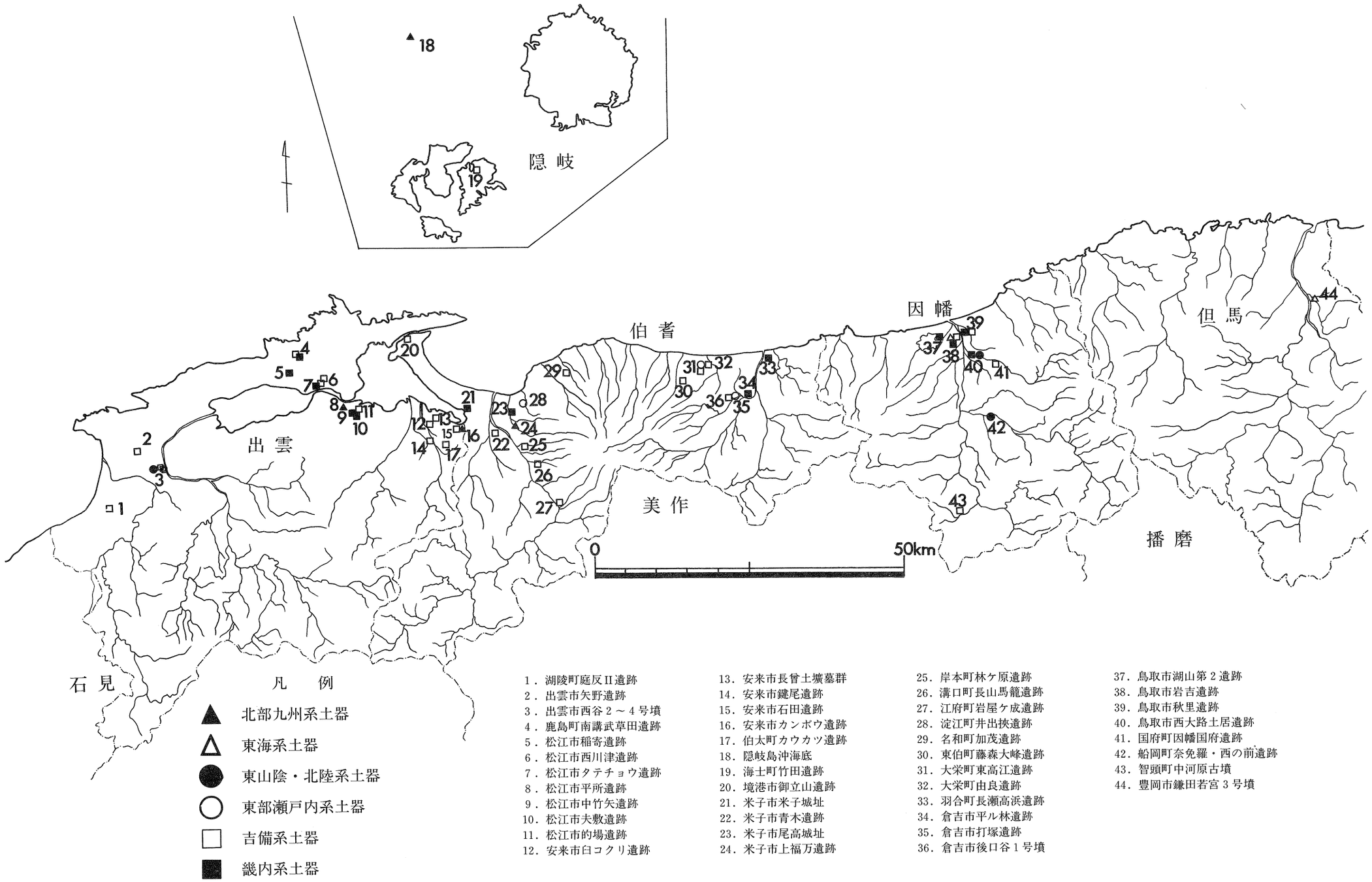
畿内系土器（第4表参照）

ここでは畿内と播磨・丹波など周辺の土器を分別し得ず、外面タタキ調整を行なう甕とそれに共伴する土器として集成しており、布留系土器も割愛した。

山陰地域で典型的な河内型・大和型庄内甕の出土は尾高城址・長瀬高浜遺跡・南講武草田遺跡などごく僅かであり、あとのものは伝統的第Ⅴ様式[註④]と呼ばれるもので、製作技法などは第Ⅴ様式の土器と変わりないものである。畿内地域でも典型的な庄内甕は纒向遺跡を中心とする北桜井と大倭・柳本古墳群を中心とする南天理に分布する大和型庄内甕[註⑤]と河内平野の東大阪・八尾市を中心に製作された河内型庄内甕であり、それが主体的に分布する地域は従来考えられていた範囲より狭くまた、庄内甕を製作している地域でも伝統的第Ⅴ様式甕がなお使用される。このことから山陰地方で出土するタタキ甕もあまり時代が遡るものではなく、青木Ⅴ・Ⅵ～Ⅶ式に降るものが多い。

このように庄内式併行期の畿内系土器も微々たるもので、畿内系土器が山陰地域に影響を及ぼすのは布留式期に入ってからであり、その影響力も他地域に比較して少ないものである。

なお、表には掲げていないが手焙形土器が鳥取県倉吉市三度舞大将塚墳丘墓・羽合町長瀬高浜遺跡・鳥取市大桷遺跡から出土しており、これらも在地の伝統から出自を追うのは難しく畿内あるいは吉備からの搬入が考えられる。



1．湖陵町庭反Ⅱ遺跡
2．出雲市矢野遺跡
3．出雲市西谷２～４号墳
4．鹿島町南講武草田遺跡
5．松江市稲寄遺跡
6．松江市西川津遺跡
7．松江市タテチョウ遺跡
8．松江市平所遺跡
9．松江市中竹矢遺跡
10．松江市夫敷遺跡
11．松江市的場遺跡
12．安来市臼コクリ遺跡
13．安来市長曽土壙墓群
14．安来市鍵尾遺跡
15．安来市石田遺跡
16．安来市カンボウ遺跡
17．伯太町カウカツ遺跡
18．隠岐島沖海底
19．海士町竹田遺跡
20．境港市御立山遺跡
21．米子市米子城址
22．米子市青木遺跡
23．米子市尾高城址
24．米子市上福万遺跡
25．岸本町林ケ原遺跡
26．溝口町長山馬籠遺跡
27．江府町岩屋ケ成遺跡
28．淀江町井出挟遺跡
29．名和町加茂遺跡
30．東伯町藤森大峰遺跡
31．大栄町東高江遺跡
32．大栄町由良遺跡
33．羽合町長瀬高浜遺跡
34．倉吉市平ル林遺跡
35．倉吉市打塚遺跡
36．倉吉市後口谷１号墳
37．鳥取市湖山第２遺跡
38．鳥取市岩吉遺跡
39．鳥取市秋里遺跡
40．鳥取市西大路土居遺跡
41．国府町因幡国府遺跡
42．船岡町奈免羅・西の前遺跡
43．智頭町中河原古墳
44．豊岡市鎌田若宮３号墳

第６図　出雲・隠岐・伯耆・因幡における弥生時代後期～古墳時代初頭の外来系土器分布図

東瀬戸内系土器（第５表参照）

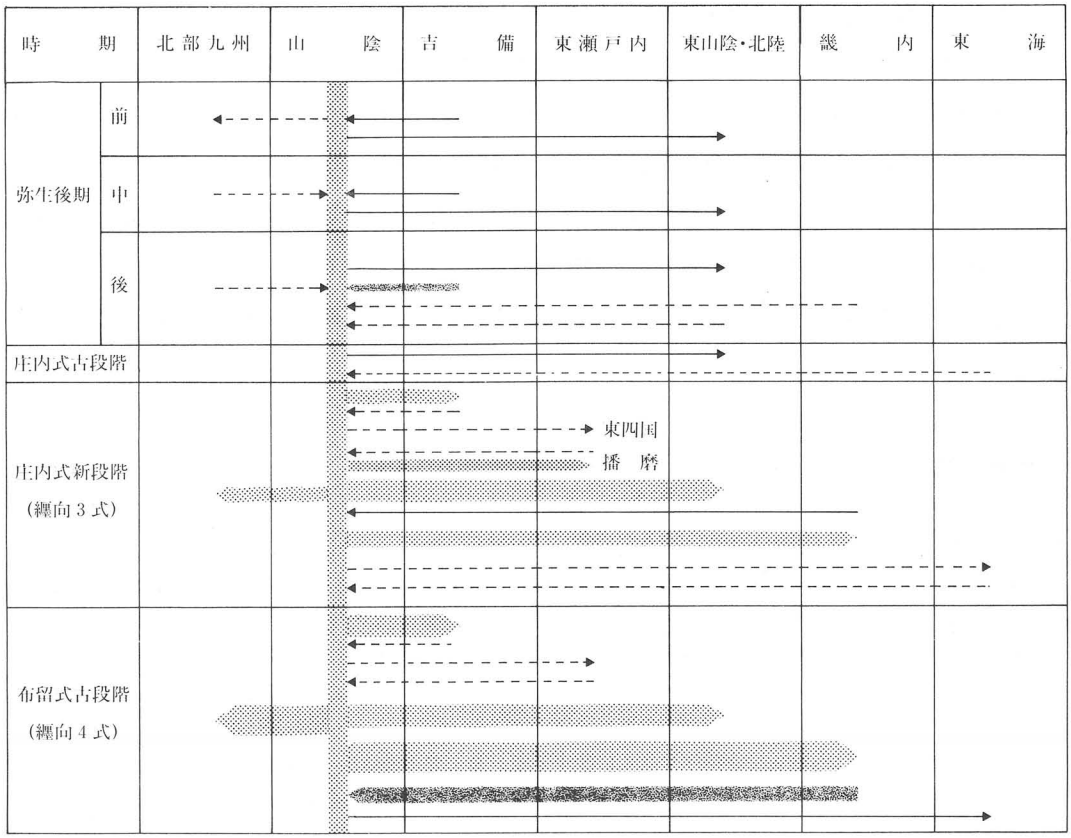
従来あまり注目されてはいなかったが、若干存在が知られる。井出挾遺跡のものは報告書中では弥生土器とされているが、東四国の甕（阿波の黒谷川Ⅳ式[註⑥]・讃岐の下川津Ⅵ式[註⑦]）に類似している。内面上半が指頭圧痕でなくヨコ方向のヘラケズリであることが相違点であるが、共伴する土器との年代も合うため断定はできないが表に含めた。

東瀬戸内系土器は畿内系に足並みを合わせ、庄内式新段階～布留式にかけて搬入されている。

東山陰・北陸系土器（第６表参照）

但馬に隣接する因幡地域では若干出土するが、出雲市西谷３号墳のものは従来から言われているように異色で、３号墳の被葬者の権力を表徴するものである。

東山陰・北陸系土器は弥生時代末の的場式期に若干搬入されるが、庄内式新段階～布留式にかけてあまり山陰内に搬入されず、逆に但馬～能登にかけての地方が一方的に山陰系土器を受け入れている状態である。



第７表　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器移動概念模式表（山陰地域を中心として）

上記のことから山陰内に流入する外来系土器を青木Ⅳ式期（庄内式古段階）を境にして前後２時期に分割することができる。[註⑧]（第７表参照）

Ａ－１類　弥生時代後期に流入し、その後途絶えるもの（当地での山陰系土器は庄内式期に搬入が始まり布留式古段階期にピークを迎える）———東山陰・北陸系土器・北部九州系土器

Ａ－２類　弥生時代後期に流入し、その後は微量になるもの（当地での山陰系土器は庄内式期に搬入が始まり布留式古段階期にピークを迎える）———吉備系土器

Ｂ－１類　庄内式期に搬入が始まり、布留式にピークを迎えるもの（当地での山陰系土器も同様の展開をする）———畿内系土器

Ｂ－２類　微量ではあるが庄内～布留式古段階期に搬入されるもの（当地での山陰系土器の出土は、播磨を除いて微量）———東海系土器・東部瀬戸内系土器

これによれば、石田遺跡出土の吉備系と考えられる鉢は吉備系土器の山陰内への搬入が衰退する青木Ⅴ・Ⅵ式期≒庄内式新段階）に当たり、やや特異な例と言える。

吉佐の地では東隣のカンボウ遺跡から弥生時代後期の北部九州系・吉備系土器の出土が見られ、古墳時代後期には石田遺跡の一角に作り付け竈を備えた住居が作られ、風土記に記載されて、当地に降臨したと伝えられる天穂日命の墳墓という伝承を持つ神代塚古墳が築造されるなど、各時代を通して外来色の強い地域である。この地は出雲と伯耆の国境という地理的性格ゆえ、能義平野・米子平野勢力の狭間であり、外部からの貫入も比較的容易であったと考えられる。

冗長にのべてきたが、山陰内に入ってくる外来系土器、他地域に搬出される外来系土器は比較的研究の進んでいない分野であり、不明な点が多く、これからの研究の進展に期待したい。

参考文献

①・野田久男・清水真一「日本の古代遺跡９　鳥取」　保育社　1983
東森市良　他「伯太町安田地内試掘調査報告書」『伯太町埋蔵文化財調査報告書』第３集 伯太町教育委員会
②・赤塚次郎　「東海系のトレース－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』第44巻６号　1992
原田幹　「Ｓ字甕の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究』Ⅴ　庄内式土器研究会　1994
③・常松幹雄　「大和・纒向遺跡における北部九州の壺形土器」『庄内式土器研究』Ⅲ　庄内式土器研究会　1992
④・酒井龍一　「和泉における伝統的第Ⅴ様式に関する覚え書－豊中遺跡出土遺物の整理をして－」『豊中・古池遺跡発掘調査概報』Ⅲ　1976・「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概要』　1975
⑤・青木勘時　「大和における庄内併行期の甕の諸相」『庄内式土器研究』Ⅲ　庄内式土器研究会　1992

⑥・菅原康夫　「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『考古学と地域文化』　1990
⑦・大久保徹也　「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告７　下川津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団1990
⑧・岩橋孝典　「山陰系土器の研究－弥生時代後期から古墳時代中期の土器移動とその背景」『第12回考古学研究室研究交流会総会資料』奈良大学文学部考古学研究室　1993

引用文献

1・亀井熙人・加藤隆昭・乗安和二三・植山茂　「因幡国府遺跡発掘調査報告書Ⅴ」　鳥取県教育委員会　1977
2・加藤利晴・杉谷愛象・辻本武・平川誠　「秋里遺跡Ⅰ」『鳥取市文化財調査報告書』Ⅳ　鳥取市教育委員会　1976
3・谷口恭子・前田均　「岩吉遺跡Ⅲ」『鳥取市文化財報告書』30　鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団　1991　なお、岩吉遺跡からは弥生中期の近江系土器も出土している。
4・野上博　他　「中河原古墳・黒本谷古墳発掘調査報告書」『智頭町埋蔵文化財調査報告書１』　智頭町教育委員会　1983
5・倉吉市教育委員会　「大谷・後ロ谷墳丘墓発掘調査報告書」『倉吉市文化財調査報告書』第40集　1985
6・金坂昭太郎・名越勉　「東伯地域遺跡群分布調査報告書」『東伯町文化財調査報告書』第６集　東伯町教育委員会　1983
7・竹歳勉・田中秀明・原田雅彦　「由良遺跡発掘調査報告書」　大栄町教育委員会　1978
8・馬淵義則　「東高江・西高江遺跡発掘調査報告」『大栄町文化財調査報告書』第24集　大栄町教育委員会　1981
清水真一　「山陰の播磨系土器について」『庄内式土器研究』Ⅲ　庄内式土器研究会　1992
9・清水真一　「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽　山陰編』　木耳社　1992
10・中原斉　他　「佐川遺跡群」『鳥取県教育文化財団報告書』20　財団法人鳥取県教育文化財団　1986
11・益田晃・中原斉・瀧川友子　「長山馬篭遺跡」『溝口町埋蔵文化財調査報告書』第５集　溝口町教育委員会　1989
12・財団法人　鳥取県教育文化財団　「久古第３遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書」『鳥取県教育文化財団報告書』15　1984
13・青木遺跡発掘調査団　「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ　Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｈ地区」　1978
14・門脇豊文　「御立山遺跡」『境港市埋蔵文化財調査報告書』１　境港市教育委員会　1991
15・永見英　「長曾土壙墓群」　安来市教育委員会　1981
16・今岡一三・寺尾令　他　「一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　（臼コクリ遺跡・大原遺跡）」　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1994
17・山本清　「島根県安来市鍵尾遺跡調査報告」　1965
18・東森市良　他　「伯太町安田地内試掘調査報告書」『伯太町埋蔵文化財調査報告書』第３集　伯太町教育委員会　1992
19・近藤正・前島己基　「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻第４号　1972
20・内田律雄　他　「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ　（海崎地区２）」　島根県土木部河川課・島根県教育委員会　1988
21・柳浦俊一　他　「タテチョウ遺跡発掘調査報告Ⅱ」　島根県土木部河川課・島根県教育委員会　1987
22・赤沢秀則　「南講武草田遺跡」　鹿島町教育委員会　1992
23・隠岐島前教育委員会　「郡山東古墳の調査」　1984
24・出雲考古学研究会　「西谷墳墓群」　1980

25・田中義昭　他　「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」　島根大学法文学部考古学研究室　1992
26・出雲考古学研究会　「出雲平野の集落遺跡Ⅱ」　1986
27・杉原清一・藤原友子・梶谷尚武　「庭反Ⅱ遺跡」　湖陵町教育委員会　1986
28・瀬戸谷晧・松井敬代・宮村良雄　「豊岡市文化財調査報告書集1989年度」『豊岡市文化財調査報告書』23～25　豊岡市教育委員会　1990
29・長岡充展・松本琢己・笹尾千恵子・太田正康　「上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群」『鳥取県教育文化財団調査報告書』17　財団法人鳥取県教育文化財団　1985
30・鳥取県立博物館　「卑弥呼の時代をさぐる　～発掘が語る弥生文化～」　1990
31・卜部吉博・丹羽野裕・深田浩・岩橋孝典　他　「一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡」　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1994
32・前島己基・松本岩雄　他　「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」　島根県教育委員会　1977
33・谷口恭子・藤本隆之　「西大路土居遺跡」　財団法人鳥取市教育福祉振興会　1993
34・中原斉　他　「秋里遺跡発掘調査報告書（西皆竹地区）」『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告』3　鳥取県埋蔵文化財センター　1988
35・山桝雅美・原田雅弘　「秋里遺跡（西皆竹）」『鳥取県教育文化財団調査報告書』25　財団法人鳥取県教育文化財団　1990
36・中村徹・坂本敬司・津川ひとみ　「湖山第2遺跡発掘調査報告書」『鳥取県教育文化財団調査報告書』11　財団法人鳥取県教育文化財団　1982
37・倉吉博物館　「発掘された古代の伯耆と因幡」　1981
38・財団法人鳥取県教育文化財団　「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ」『鳥取県教育文化財団調査報告書』　11　1982
39・財団法人鳥取県教育文化財団　「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ」『鳥取県教育文化財団調査報告書』　12　1983
40・尾高城址発掘調査団・米子市教育委員会　「尾高城址Ⅱ　米子市尾高城址発掘調査報告」　1979
41・現地で米子市教育委員会・杉谷愛象氏から教示を得た。
42・広江耕史　他　「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（夫敷遺跡）」　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1989
43・鹿島町立歴史民俗資料館　「古代狭田王国の興亡」　1989
44・広江耕史・内田律雄・宮沢明久　他　「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1983
45・真田広幸　他　「打塚遺跡発掘調査報告」『倉吉市文化財調査報告集』第32集　倉吉市教育委員会　1984
46・樋口裕達・角田徳幸　「井出挟遺跡発掘調査報告」『淀江町埋蔵文化財調査報告書』第10集　淀江町教育委員会　1987
47・山桝雅美　「奈免羅・西の前遺跡」　鳥取県郡家土木事務所・船岡町教育委員会　1986

補　記

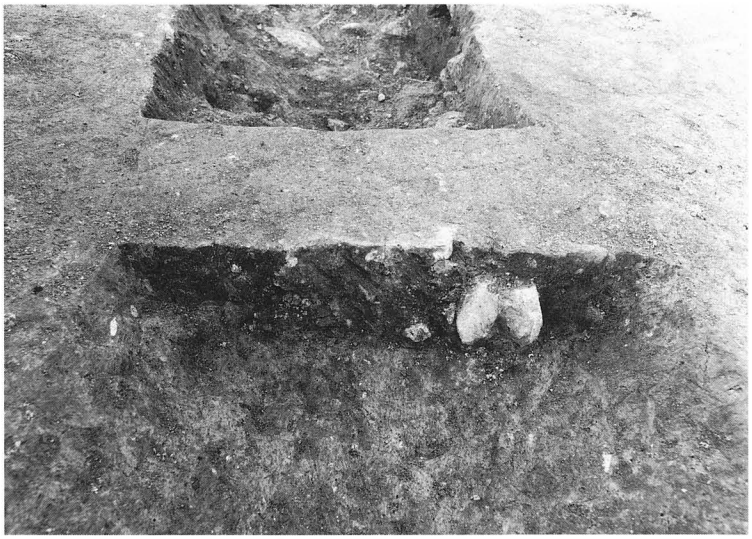
上福万遺跡出土の北部九州系土器としていたものは、脱稿後に福岡市教育委員会・常松幹雄によって、山陰在地の土器と判定された。また、松江市手角町・寺ノ脇遺跡から弥生後期中葉（山中式中段階）の東海系パレススタイル壺が出土していることを確認した（近藤正　他　「寺の脇遺跡」島根県教育委員会　1969）。本章をまとめるにあたって文化課職員の他、常松幹雄・清水真一・松宮昌樹の各氏にご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。

1区遺構検出状況
（北側より）

1区遺構完掘状況
（北側より）

1区北壁
（南側より）

１区ＳＤ０１・Ｂ断面
（北側より）

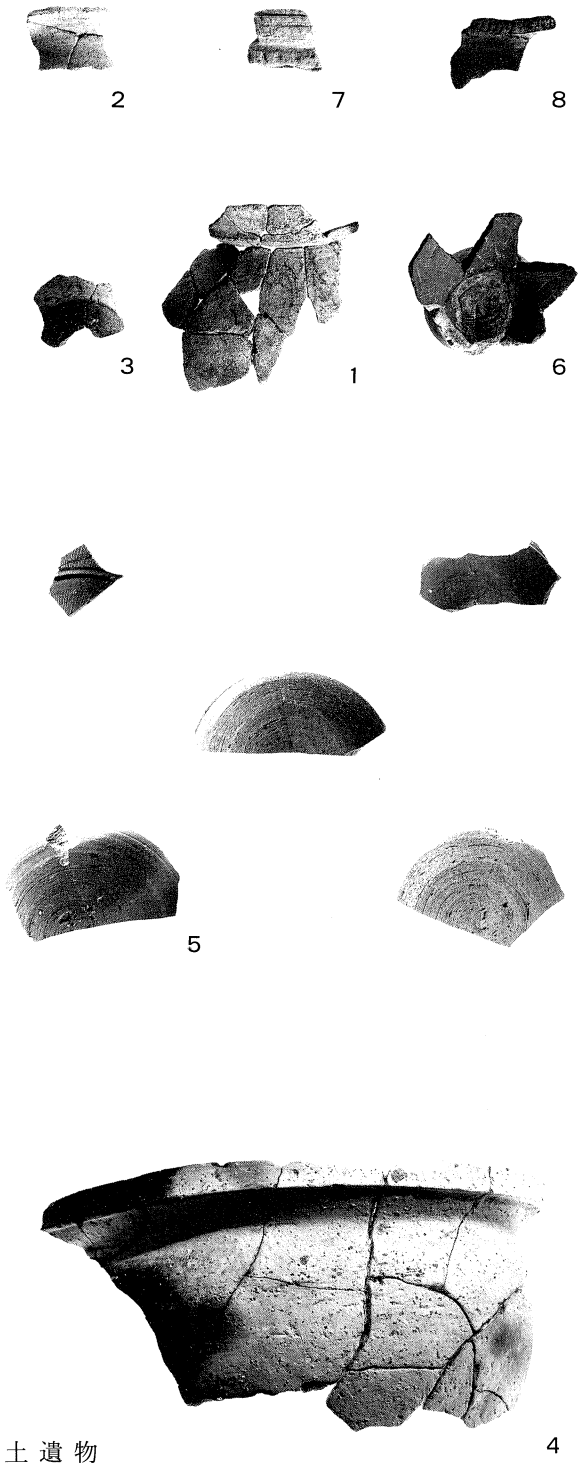


１区ＳＤ０１・Ａ断面
（南側より）

１区ＳＤ０１遺物
出土状況

2区完掘状況
（南側より）

1区作業風景



石田遺跡出土遺物